

序

“一般検査”という名称は、尿・体腔液・大便・分泌物など、血液・組織・剥離細胞を除く生体から得られる試料の定性・半定量検査、肉眼観察、顕微鏡的検査など基本的臨床検査の総称である。欧米では一般検査に相当する呼称（例えばgeneral testなど）はなく、尿検査（urinalysis）・体腔液検査（fluid test）・大便検査（fecal analysis）など独立して取り扱われている。一般検査は古典的な検査であるが、試料の多くは採取が容易であり、さらに近年の技術的進歩もあり、現在最も躍進を遂げている分野でもある。常に検査の最前線に位置しているものの、長年の経験と勘を要する領域でもあり、判定そのものが病名に直結する部分が大である。例えば実地医家からの、術中検査材料に小さな糸状物質が出たが、これは何かを迅速に調べてほしいといった難題への対応も、一般検査室が行うのが通常である。

本書出版の企画は約1年前であった。分子生物学に関する書籍の刊行に実績のある羊土社編集部から本書の発刊を打診された背景には、一般検査を実践している技師はもとより、尿・穿刺液・大便・生殖器等からの試料の分子生物学的分析手法を用いる研究員など、これを扱う多くの担当者に対し、その基本的な検体取扱い法・検査術式法等を学んでもらうため、これら基本的知識をまとめた刊行物が必要との多くの声が契機となったとも聞いている。

本書はもともと、臨床検査技師が日常臨床検査で判定に迷う成分に遭遇したときの迅速対応のために役立つポケット版の参考書として刊行されたものであるが、同国家試験受験者の総まとめ書として、あるいは研修医・実地医家・看護師等、そしてそれら国家試験受験者の方々にとっても「一般検査虎の巻」として、かつ即戦力として十分にお役に立つものと信じている。筆者はこの分野での指導的立場にある方々であり、記載内容には自信を持っている。しかし監修者らの浅学非才も散見されると思われ、読者方々の忌憚のないご意見をお待ち申し上げます。

2009年5月

監修者を代表して
伊藤 機一